

争論

小学校英語は「活動」で

オピニオン

麻生健撮影



この春、小学5～6年生に「外国語（英語）」が必修となった。ただ、国語や算数のような「教科」ではなく、教科書のない「活動」という位置づけた。音楽などを使い、楽しく英語に触れるのがいいのか。それとも教科として「読み、書き」もすべきなのか。

- ・「活動」では甘いのか
- ・受験科目にしていいのか
- ・英語嫌いをつくらないか



伊藤菜々子撮影

広島県尾道市立日比崎小学校長

大垣 公子さん

日比崎小では1～6年生を対象に7年前から英語の活動を続けています。3年前、文部科学省の研究指定校になりました。現在は週1回1コマで年に35時間です。

「英語を話せる」とか「英語の学力をつける」ことが目的ではありません。活動を通じて人とのかわりを楽しむ、相手のことを思いやる、思いを寄せる、そんな子どもを育てることがねらいです。

昨年度の2年生は「ヘルシーピザを作ろう」という活動をしました。生活科で育てたミニトマトやキュウリを使ってALT（外国語指導助手）の先生に食べてもらおうと、野菜の名前を教えてもら

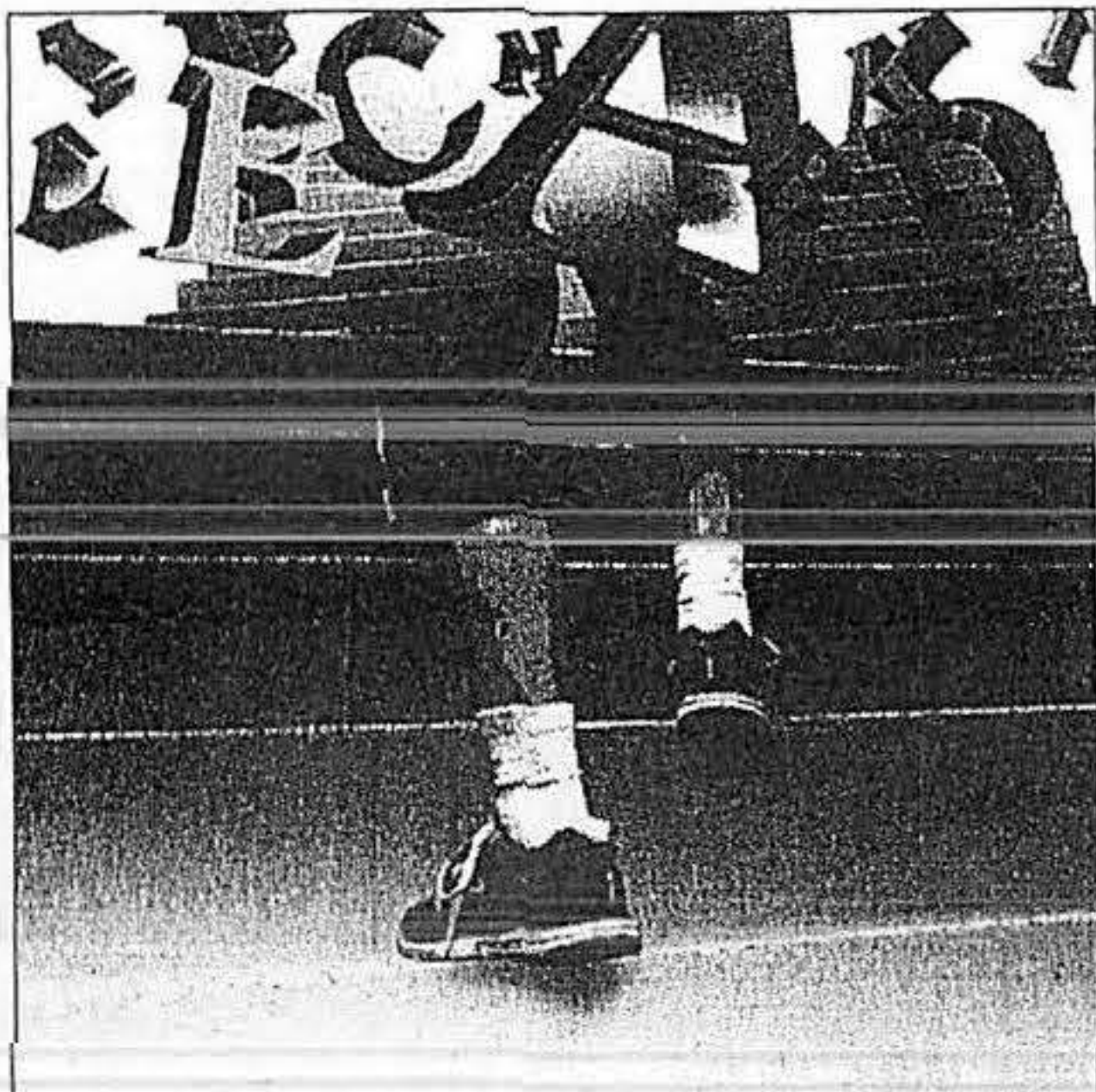
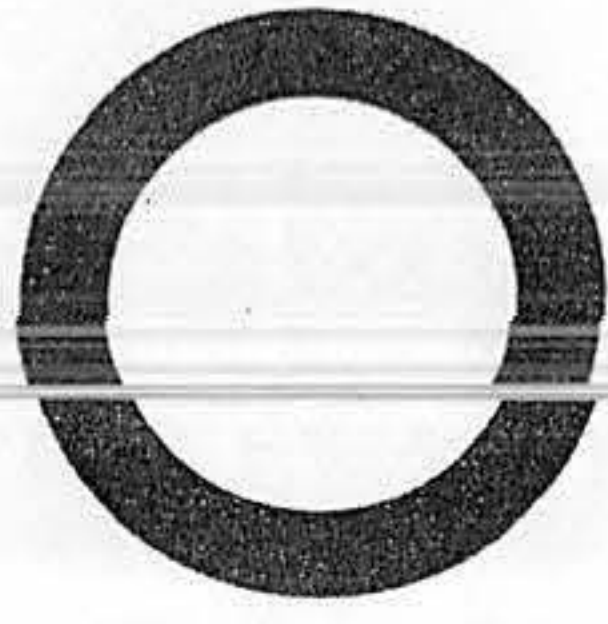
「伝えたい」と思える場が大事

57年広島県生まれ。県内の尾道市や福山市の小学校で教諭、教頭などを務め、07年から現職。08年に研究開発学校の指定を申請。

う。ただ単語を教わるのではなく「I like なになに」とか「I want どいどれ」といった文章で習う。ALTに好きな野菜を尋ねてピザを飾りました。5年生は総合的な学習で、地元の特産を使った「日比っ子版尾道焼をつくったのですが、ALTの先生に教えてあげよう」と決まりました。タコは英語でなんと言ったろうと調べたり、家庭科で学んだことを生かしたり、国語の時間に学んだ順を追って説明する話し方を探り入れたり。

これは担任が多数の教科や領域を扱う小学校の、しかも「活動」だからこそできる。担任は一人ひとりの個性や、ほかの教科・領域で何をやっているかをわかっていきます。みんなできれどれをどうつなごうかと工夫しています。

英語活動の初期は、歌ったり踊ったり、タンバリンをたたいて



コラージュ=羽生春久

小学校英語

2011年度から小学校で必修となったのは「5～6年生で、年間35時間（週1コマ程度）の外国語（英語）活動」。中央教育審議会の答申を受け、文部科学省が08年春、新学習指導要領の中で公表した。中学校の文法などを前倒しするのではなく、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をめざす。

紙面とコラボした「朝日Opinion」争論、耕論を5月1日午後10時半～11時55分にCS朝日ニュースターで放映。社会経済の大胆な復興を経営と危機管理の専門家が論じます。

「エイプリル、エイプリル」と唱え、月の名前を覚えさせたり。そんな授業が多かったように思いますが、子どもたちは楽しんでいました。話しているようですが、それでいいのかわかりません。話しているうちに、私も授業が楽しくなりました。話すことを急がせず、もっと聞くことを大切に。そして子どもたちが自分から伝えたくてたまらない、聞きたくてたまらないという場をつくる方が大事じゃないかと。わかっていなかったのは、ハイドルを高くしないことです。今できることに、少しだけ知的好奇心を満たすようにすると、子どもたちは満足するんです。

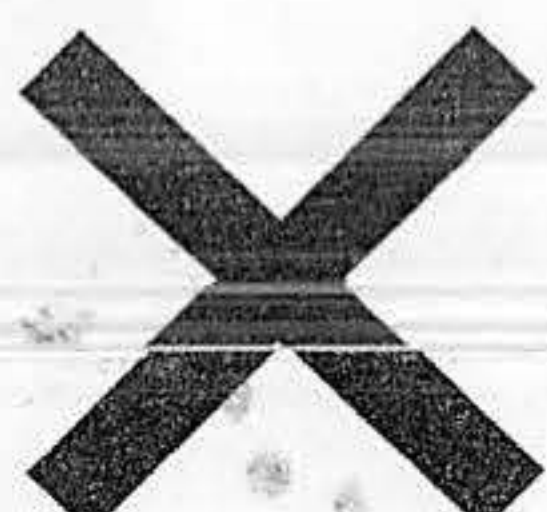
私も英語には苦手意識がありません。赴任当初は中学・高校で受けた英語教育のイメージがあり、子どもたちに覚えさせないといけない、って。でも、そうじゃないです。大学の先生から「英語を使って人とかわる」とする、教師はそのお手本にならばいい」と言われました。私も時々、授業に顔を出します。英語がうまく話せなくても、かわり方のお手本として向き合えばいいんです。

小学生の時から単語をたくさん覚えさせよう、教科にすべきた、という意見も聞きます。それで授業が伸びやかなものになるでしょうか。むしろ小学生のうちから英語嫌いをつくってしまう、そんな心配があります。教科にしたなら、中学受験の受験科目になるでしょう。子どもたちは試験対策として英語に迫られるようになる、そんな危惧もあります。

言葉や文化が違っても伝えることの心地よさ、伝わった時の喜び、相手の気持ちがわかった時の共感。外国語活動はそれを味わう時間だと思っています。

活動を通じていつのまにか英語に慣れ親しみ、もっと英語を知りたい、話せるようになりたいという思いを持たせて中学校へ送る。中学で教科として習い「あ、こういうことだったのか」とわかる。そうすることで英語を自分のものとして習得できると思います。

（聞き手 編集委員・刀弥正明）



英語が「活動」というのでは十分ですね。できるだけ早く、国語や算数と同じ「教科」に格上げすべきです。

私は本来、小学1年生から英語に触れさせる必要があると思っています。1～2年生なら「活動」でもかまいません。歌やビデオ、先生の発音を耳で聴きながら、音楽のように英語になじませる。3～4年生になれば、「総合的な学習の時間」を使い、日本の外に異文化があることも教えましょう。ゲームやクイズも多用し、英語を発声させるのです。

そして5～6年生になれば教科として、きちんと教科書を用意

し、単語や簡単な文例、文法を含め、「読み・書き」もさせるべきだと思います。テストと通知表での評価も必要ですね。中学校への入試科目になるのも、私立であれば自然な流れでしょう。

国際教養大学長・元中教審委員

中嶋 嶺雄さん

36年生まれ。東京外国語大学教授、学長などを経て、04年から現職。「世界に通用する子供の育て方」など著書多数。

実は私は2006年、中央教育審議会の外国語専門部会が小学校英語について提言したとき、その部会のまとめ役でした。「5年生から、週1コマ程度の英語活動を必修に」とし、「今後、教科としても検討を」とまとめたわけですが、正直に言って、文部科学省との妥協の産物でした。

まず「小学校で英語を必修」とするため、ゆるい内容で妥協せざるをえなかった。でも突破口ができた以上、できるだけ早く真の教育に近づけなければなりません。小学1～4年生は頭がやわらかく、この時期に体になじませれば、年齢を重ねてもなかなか忘れ

ない。私自身、4年生でバイオリンを習った経験から確信しています。私が師事したのは鈴木鎮一先生。スズキ・メソードという幼児教育法を生んだ著名人ですが、「耳で聴いて覚え、それを繰り返して練習する」という方法をぜひ、英語教育にも応用すべきです。

そして小学5～6年生は、できるだけ多くの単語を覚えるのがいい。1千語近く知っていれば、高校、大学で6千～7千語へと、無理なく増やしていける。簡単な詩などを声に出して読むうち、基本的な文例も覚えるでしょう。

後は、とにかく知っている単語や文章をつなげ、言いたいことが相手に伝わりさえすればいいのです。少しばかり文法や発音が間違っているのがいい。子どもたちは自分の英語が通じるのだから

急いで、小学校教員の養成を見直す必要があります。すべての教員が英検2級か準1級ぐらいの能力をつけられるようなプログラムを準備すべきだと思います。

（聞き手 山本晴美）

「遊び」に終われば時間の無駄